

## 暗黒年代記 魔に支配された世界の物語 三

人間世界がバケモノたちの群集団——異邦境の邪悪な軍勢によって滅亡させられてから四年の月日が経過しようとしていた。

崩暦四年。かつてのような大規模な抵抗組織は存在しなくなったとはいえ、人間たちの抵抗はまだ細々とだが続いている。人間たちはまだ、バケモノたちに完全に支配されることを望んではいなかったのだ。

だが、現状は、人間たちにとっては絶望に満ちた情勢という他ない。人間たちは細々と抵抗を続けていたが、それは山野を逃げ回り、嫌がらせ程度の反抗がやっとという有り様であった。その一方で、バケモノたちによる「人間狩り」はいまだ激しくおこなわれており、世界の何処かで毎日のように捕まった人間たちが殺されていた。

数が少なくなった分、バケモノたちはまるで貴重品を取り扱うかのように、人間たちを丁寧にとり扱った。すぐには殺さず、散々、騷り、いたぶり、弄んだ後、ゆっくりと、ゆっくりと、時間をかけながら慎重に殺すのだ。より長く、より多くの苦痛を与えながら殺すことが、この頃のバケモノたちの一種の流行になっていた。

一例としてあげるならば、短い抵抗の末にバケモノたちに捕まった旧バレリア大公国出身の女騎士ミラベル・アーマインの最後は次のような惨状であった。

まず、ミラベルは、彼女を捕まえたオーガ、オーク、ゴブリンたちに順番に強姦された。一度に数十匹のバケモノを相手にし、精も根も尽き果てて、並の人間であればすでに死んでもおかしくないような状態になりながらも、それでもまだ彼女は生きていた。騎士としての矜持を胸に秘めていた彼女は、決してバケモノたちに屈しないと心に強く誓っていたからだ。

「……生きてさえいれば、必ず好機が訪れる。生きてさえいれば……私は決して、バケモノなどに負けはしないッ！」

それが彼女の苦痛を長引かせた。

バケモノたちは、息も絶え絶えになりながらも、まだ死なないミラベルを面白がり、彼女の膣内に手を突っ込んで子宮を引きずりだした。そして、子宮が臓器として繋がっている状態で、卵巣を潰したのである。ふたつとも。

「ぐうぎやうあああああああああああああああッツツ！」

あまりにも凄まじい激痛に、ミラベルはまるで怪物のような咆哮を発して白目を剥いて口から泡を吹いたが、バケモノたちは笑いながらさらなる暴虐を実行に移した。両手・両足を切断し、身体を器具に固定すると、頭蓋骨を引っぺがして、脳をむき出しにし、それをまるでウニの中身でも食べるかのようにスプーンですくって食べはじめたのである。この時、ミラベルはまだ生きており、バケモノたちに脳を一口づつ食べられるつど、顔に様々な変化を浮かべたそうだ。バケモノたちを特に喜ばせたのがミラベルが発する絶叫で、彼らはそれを聞いて大笑いしたそうだ。

ミラベルの他にも、悲惨で凄惨な最期を遂げた人間は数多い。生きながら全身の皮を剥がされた者、弱い炎でじつくりと炙られながら殺された者、親子同士で争いをさせられ、勝った方に負けた方の肉を食わされてから殺された者……あげればキリがない。

以前であれば、バケモノたちもここまで人間を残酷に殺しはしなかった。彼らは低脳だが、人間たちが犠牲となった仲間のために報復をおこなう種であることを承知していたからだ。だが、いまや人間とバケモノたちの戦力差はあまりにも圧倒的であったため、バケモノたちは余裕をもって人間を殺すことができるようになったのである。それがこの残酷な現実を産んだのであった。

だが、この残虐性の増長は、思わぬ弊害をもたらす結果に繋がった。前途を悲嘆した人間たちが、

「バケモノたちに捕まって無惨に殺されるよりは、いつそ自分たちの手で――」

と相次いで自殺するようになってしまったのである。この結果、バケモノ

たちの手で殺される人間よりも自死する人間の方が遥かに多くなってしまい、人間の数は急速に減少していった。

これに頭を抱えたのが「選ばれし三匹」の内の一匹であるトウトウグアであった。彼は、各地から人間たちの集団自殺の報を受けると、慌てて各地の情報をまとめて推計をだした。その結果、野で生き残っている人間の数はさらに減少を続け、その数は五万人を下回っていることが判明したのである。

トウトウグアはまるで青蛙のように青くなった。彼は人間が絶滅しても一向に痛痒を感じたりはしなかったが、人間の絶滅に伴い、同胞たちの凶暴性の矛先が内側へと向かうことを恐れたからだ。各地に建設された養殖場では、毎日のように人間たちが産み落とされ、育成されているが、人間が「人間」として使い物になるようになるまではそれなりの「教育」を施さねばならず、時間がかかる。その前に異種族連合である現状が崩壊しては元も子もない。

困ったトウトウグアは同僚に相談を持ちかけた。

相談を受けたオーガ族の勇将グルドは、顔にあからさまな不快感を浮かべながら、ひとつの案を提供した。

「もし、人間たちのこれ以上の勢力減退を危惧するならば、彼らに希望を与えることだな」

「どのようにして？」

「養殖場を二つか三つ、人間たちの手で襲わせる。そして彼らの手でそこに捕まっている人間たちを解放させるのだ。そうすれば人間たちは味方の数を増やすことができるし、低下していた士気も改善するだろう。人間たちの勢力を回復させたいのであれば、彼らに戦えば「勝てる」ということをまず思い出させてやることから始めるべきだ」

人間世界が崩壊して以降、人間たちは戦いに負けっぱなしである。もちろん、個々の戦いや小規模な戦闘で勝利したことはあっても、大局的にはずっと敗北したままだ。それが人間たちをより一層、絶望の淵へと追いやっていくのである。それをどうにかしなければ、人間たちの勢力はますます弱くなり、自死は今後も続くだろう。

だが、この案に、トウトウグアは難色を示した。

「養殖場をひとつでも失うことは、今後の繁殖計画に支障をきたすことに繋がる。何しろ、人間の繁殖能力は、自然界でも指折りに低いからな。しかも成長し、「人間」として使い物になるようになるまでは、さらにより一層の時間がかかるのだ。効率的に管理してやらねば数が増えんのだよ、困ったことに」

「だとしたら、人間を狩ることを禁じるしかないな。五年か一〇年、同胞たちに人間を殺すことを禁止させる。破った者には厳罰を与えることも辞さずだ。これにより、人間は自然に勢力を回復させることができるはずだ」「いや、それはもつと困る！ そんなことをしたら、内乱が起ころうことは必死ではないか。人間を共通の「敵」として認識している我々バケモノたちが、「敵」を失えばどのような惨状に繋がるか、少し考えればわかるはずだ」

「……では、どうしようもないではないか」

この時、トウトウグアの元に、一通の手紙がもたらされた。差出人は、「黒い家」の主にしてふたりと同じ「選ばれし三匹」の内の一匹、ターニヤであった。

「グルド、朗報だ。ターニヤの奴、どうやら人間の新たな繁殖方法を確立したようだぞ」

「新たな繁殖方法、だと……」

グルドの顔にあからさまな不快感が浮かんだ。

それに気づいた様子もなく、トウトウグアが話を続ける。

「実は以前、ターニヤの奴に相談していたのだよ。人間をもつと効率よく繁殖させる方法はないものか、とな。ターニヤの奴、「善処する」と言っただけで、それっきりだったのだが、どうやら覚えていてくれたらしい。私はこれからその繁殖方法を確認するために「黒い家」に向かうことにするが、君はどうするかね？ 一緒に行くか？」

「いや——」

やめておこう——と言葉を続けようとして、グルドは途中で止めた。

グルドは一度「黒い家」を訪れたことがある。そして、行って後悔した。あそこはバケモノの彼でさえ吐き気を催すような「狂気の世界」だったからだ。

だが、この時、彼は自分は見なければならぬような気がしていた。人間世界を滅ぼした「績」の一旦は彼にある。ならば、この行く末を見届ける「責」もあるはずのだ。気が進まなかったが、グルドは同僚に告げた。

「……俺も行こう。行くべきだ」

「そうか。では、行こうか」

かくしてふたりは飛竜に乗ると、「黒い家」がある旧バレリア大公国跡地へと向かったのであった。

続きは本編にて